

第2回狛江市基本計画策定第三分科会会議録

- 1 日 時 令和元年6月18日(火)午後7時～9時2分
- 2 場 所 狛江市防災センター4階 402会議室
- 3 出席者 委員長 高橋 信幸 副委員長 太田 ひろみ
副委員長 佐藤 正志 委 員 井沢 潤
委 員 梶川 朋 委 員 周東 三和子
委 員 林 健彦
事務局 田部井政策室長 西村企画調整担当主任
- 4 欠席者 委 員 松本 すみ子 委 員 林田 直子
- 5 議 題 1. 施策の現状と課題について(4 子どもがのびのびと育つまち)
2. 施策の現状と課題について(6 生涯を通じて学び、歴史が身近に感じられるまち)
3. その他
- 6 会議概要

議題1 施策の現状と課題について(4 子どもがのびのびと育つまち)

—事務局より資料の説明—

委員長 それでは、この「4 子どもがのびのびと育つまち」について、まずは普段皆さんが考えていることを自由に議論していただきたい。

梶川委員 家族形態が多様化している中で、それぞれの考え方や価値観を尊重していくことがこれからは大事になると思う。ひとり親家庭への支援等もあるが、子どもも障がい児や学校に通えない子もいる。そのような子たちが、それぞれに居場所を持ちながら、孤立することなく、地域全体で子育てをしていけるようなまちになれば良いと思う。

周東委員 子どもの居場所や遊び場についてだが、プレーパークはあるが、子どもが自由に遊べる場や親子が一緒に過ごせる場がもっとあったら良いと思う。市民センターを考える市民の会という会に参加しており、公民館の建替えの際には、1階に親子が使えるフリースペースのようなものができると良いと提案している。他の地域センター等でも、多少は親子で遊べる場所はあるが、いつでも自由に使える場所というのは少ないため、そういう人たちが過ごせる場所や、地域の大人とも交わるような場所ができたら良いと思う。

次に、保育園についてだが、保育園は増えてはいるが、保育園が増えるとそれに伴い需要も増えていくため、待機児ゼロというのは望ましい方向性ではあるが、その実現というのは難しいところである。狛江市では、比較的大

きなマンションが建設される等、若い子育て世帯が転入してきているという印象がある。一方で、小学校も不足していて、校舎を建て増しするという話もあるようなので、長期的にみて、子どもが安心して通える範囲の小学校に通える施策が必要だと思う。

林 委員 居場所についてだが、子ども食堂や学習支援等が民間の力を活用してできているということは良いことだと思うが、行政においてもそれらとのネットワークを充実していくことが必要だと思う。

次に、学校教育については、外国人の子どもに対する相談窓口がなく、また、外国人も含めた、一人ひとりの子どもがきちんと公教育を受けられるようにすることが大事だと思う。

太田委員 子どもの居場所についてだが、全国的に発達障がいの子も増えており、その子たちが学校から帰った後や夏休み中の居場所や遊べる場所が非常に少ないと感じる。

次に、病児・病後児保育についてだが、利用者がほとんどいないと資料に記載があったが、前日予約が必要だったり、登録しないと使えなかったりする等、親が使いにくい制度となっているのか。

事務局 ファミリー・サポート支援センターで行っている病児保育については、原則事前予約が必要で、また、医師の診察が必要ということから、利用者が少ないと考えられる。制度設計について再考が必要であると認識しており、利用者アンケートを踏まえて、今後のあり方を考えていくところである。

佐藤委員 3点ある。1点目、待機児問題についてだが、待機児をゼロにするということは大切であるが、幼保一元化ということ踏まえると、単なる保育ではなくて、教育の分野からも保育を見ていく必要があり、保育の質の充実についても視野に入れていく必要がある。待機児ゼロという量の問題と同時に、保育の質を高めていくということである。

2点目、学校教育についてだが、新教育課程への対応として、教育の質の向上をどのように図っていくかを考えていく必要がある。市として重視する教育は何か、学校教育とは何かということをはっきりと示していく必要があると思う。例えば、施策の現状と課題の中で、ICTや情報活用能力について言及しているが、例えば学校図書館を充実させていく、公共図書館との連携を図っていくという、新教育課程への対応を充実させていくための視点も必要だと思う。

3点目、学校校舎については今後一斉に改築時期に入ってくることから、それらを長期的にみてどのように対応していくのかという点についても検討する必要がある。10校の校舎の中で、比較的新しい緑野小学校や第三中学校がある一方で、雨漏りのある校舎もたくさんあるため、長期的展望に立っ

て、学校の校舎改築に取り組むという視点も必要である。

委員長 資料の現状と課題について、市としてこの程度の危機感しか持っていないことに懸念がある。待機児の問題等はあるが、例えば、子どもの貧困や虐待の問題、不登校やひきこもり、子どもの自殺等についての言及がない。高齢者の問題にも通じるが、これからますます家族が崩壊していき、家族そのものがなくなる可能性のある時代に向かっていく中で、それらの問題意識がないというのは、今後の5年先、10年先を考える基本構想、基本計画としては危機感を感じる。

これからの子育てを考えたときに、介護保険が始まる際に、高齢者の介護を個人の家庭の責任のみではなく、社会でケアするという、介護の社会化というスローガンが上がった。それが今実現しているかどうかは別として、少なくとも、介護を社会化していこうと、個人の世帯の責任で終わらせない方向性となっている。これからは、子どもの貧困や虐待等、子育てに関することも、個人の家庭の責任のみにするのではなく、社会全体で子どもを育てていく必要がある。そういう意味で子育ての社会化を打ち出していくのはどうか。そのための施策を、5年・10年先を見据えて考えていくのが基本構想や基本計画の大きな仕事なのかと思う。具体的にどうするかについては今後議論していきたいと思う。

井沢委員 子育ての社会化については共感できる。今、子育てを家族が担い切れていない部分があり、人口構造が変化し人口が減少していくとともに、女性の社会進出が当たり前になってきている。単に経済的な問題のみで保育や女性の社会進出を推進するのではなく、社会全体で、子育てを担っていくということは大切な考え方であると思う。

狛江市はそこまで規模が大きな自治体ではないため、全て自分たちでやらないといけないという考え方でなくても良いと思う。近隣自治体と連携して良いところを取り入れたり、連携して取り組むことは良いことだと思う。視野を広げれば、周りに良い環境がたくさんあるため、うまく活用して、子どもが育ちやすい環境を構築していければと良いと思う。

佐藤委員 体系分けについてだが、①が子どもの育ちの支援、②が子育て家庭の支援、③が新たな時代に即した学校教育の推進、④が子育て、⑤が青少年、⑥が学校教育となっているが、この分類で果たして良いのかどうかは疑問である。

事務局 現在の資料では、便宜上、現行の後期基本計画で掲げる重点プロジェクト及び基本施策の体系分けを活用している。①子どもの育ちの支援、②子育て家庭の支援、③新たな時代に即した学校教育の推進については、重点プロジェクトとして掲載しているもので、④子育てからは個別施策となっている。体系分けについては今後検討していくため、次期基本計画もこの体系分けで

いくということではない。

委員長 本日の議論で、体系分けを決定していくというところは難しいため、本日の議論を踏まえて、事務局で整理していただきたいと思う。

梶川委員 先程、委員長及び井澤委員より発言があったが、今後は、まさに育ちの保障を掲げていくべきなのだと思う。家庭環境によらず、狛江に生まれた子どもをまち全体で育てていくということである。子どもが抱えている困難や子育ての困難が、現状狛江でどれだけ可視化されているのか。虐待や子どもの貧困、ひきこもりの状況というのは、市として把握しているのか。

事務局 ひきこもりや子どもの貧困については、市としても課題として捉えており、昨年度アンケートを実施し現状の把握に努めている。今後、このアンケートの結果を活用し、施策に活かしていくところである。

周東委員 子ども食堂は狛江の中で何箇所かでやっているが、そこに通っている子どもたちは必ずしも貧困に陥っているかどうかは一概には分からないと思う。また、フードバンクについても市と連携して行っているが、アクションを起こしていない人たちは把握できないと思う。

今世の中で、子どもの6～7人に1人が貧困だといわれている中で、狛江市においても当然いると思われる。また、不登校やひきこもりも当然いると思う。昨今、地域とのつながりが希薄してきている状況であるため、地域で子どもを育てるといってもどのようなつながりをつくっていくかということは悩ましいところである。

委員長 以前は、自分の親が認知症や寝たきりになったということは、周りに言い辛かったのが、現在は、そのような話題を皆で議論できるようになった。子育てもそのようにしていけるのではないかと思う。子育ての社会化が進めば、子どもの貧困やひきこもりや不登校、いじめ等の話題を皆で議論できるようになるかもしれない。誰かに話すだけでも、肩の荷が降りると思う。誰にも話すことができないがために、痛ましい事件が近年発生している。社会全体でどのように子育てを支えていくか、子育ての社会化に向けて、基本計画の中でそれを具体化するような施策の方向性を盛り込んでいきたいと思う。

林委員 すべての子どもが生き生きと暮らすためには、幸せと感じている子どものみではなく、生きづらさを抱えた子どもも含めて、誰でも自分らしく生きられる社会とする必要がある。

図書館も、学校に行けない子どもの居場所となっている。鎌倉市においては、夏休み明けに子どもの自殺が増加することから、図書館職員がSNSで、学校へ無理に行かなくてもいい、図書館においでよとつぶやき、反響を呼んだ。こういう子どもたちに対して、様々な施設が受け皿になり対応していけると良いと思う。

周東委員 最近では、悲惨な虐待の事件も発生していることから親が心を開いて話すことができる居場所というものも大切である。

委員 長 子どもの貧困というのは実は親の貧困でもある。虐待も親が置かれている社会的な環境・状況の中で、結局、一番弱いところに虐待の力が向いてしまっているというのが、ほとんどである。孤立あるいは解体されていく家族を社会的にどのようにサポートできるのかを考えていかないといけない。

井沢委員 居場所というのが、現代社会の一つのキーワードだと思うが、狛江の子育て家庭の居場所は、〇〇です、ということではなく、居場所というのは、地域の中に多様に点在しているということが大事だと思う。例えば、世田谷区では空家を活用して誰でも集える場所や子育てひろば等として活用している事例がある。大きな施設も大事ではあるが、一方で、地域の中にふらっと立ち寄れる小さな居場所がたくさんあるということも狛江のコンパクトさを活かせば可能であると思う。

太田委員 居場所づくりは大切であるが、狛江に住んでいる子育てをしている親を守ろうという意識も大切だと思う。例えば、子育てしている母親がバスや電車での移動や買物をしているときに、子どもが泣きわめいた場合に、周りの人の視線が非常に冷たかったりすることもあるが、その際にちょっとした暖かい声かけをしてあげると、親にとって励みになる。子育てを地域の人たちから見守られているという意識を持つことは非常に励みになると思うため、そのような意識の醸成を推進していくことも必要だと思う。

井沢委員 世田谷区では赤ちゃんの泣き声を温かく見守っていきましょうという、WEラブ赤ちゃんプロジェクトというのが始まったようである。このようなことを区が率先して行っているのは良い事例だと思う。

梶川委員 「子どもがのびのびと育つまち」の「のびのび」という言葉は、とても牧歌的なイメージを持ってしまいが、その内実としては、不登校やひきこもり、障がいの有無や家庭環境によらず、尊重され育つことができるというような意味合いで良いか。

委員 長 基本構想において、それぞれの8つのまちの分野についての解説・考え方が載っているが、今回の基本計画の策定に当たっては、基本計画を具体化するためにそれぞれの項目に共通する基本的な考え方が最初の1ページ目にあっても良いのではないかと考えている。その上で、柱立てをしていくのが良いのではないか。ただ、基本計画の全体のスタイルであるため、他の分科会にも影響することから調整が必要な事項ではある。

事務局 他の分科会にも係る事項であるため、全体で調整させていただく。

議題2 施策の現状と課題について（6 生涯を通じて学び、歴史が身近に感じられる

まち)

—事務局より資料の説明—

委員長 それでは、この「6 生涯を通じて学び、歴史が身近に感じられるまち」について、まずは普段皆さんが考えていることを自由に議論していただきたい。

佐藤委員 2点ある。1点目、子育ての分野とも関係するが、例えば、公民館や図書館等は、障がいのある子どもの居場所になり得る。学校教育でいうと、学校図書館を障がいのある子どもの居場所の一つにしていこうという考え方が出てきている。地域の図書館もそうであるが、居場所を様々なところにつくっていくことが重要だと思う。

2点目、狛江は歴史的な遺跡や出土資料が多いまちであるが、それがほとんど活かされていない。一方で、旧第四小学校の校舎の中には、出土品や貴重な資料が数多く保管してある。それらが人の目に触れず死蔵されていることはもったいないと思う。歴史が身近に感じられるという点から、何らかの形で具体的な方向性が示せると良いと思う。

周東委員 以前の総合基本計画の策定の際にもそのような議論があり、すべてを展示していくことは困難であると思うが、バーチャル博物館のようなものがないか、と提案したことがある。

井沢委員 狛江の立地を考えたときに、行動範囲を少し広げると、スポーツに触れる機会は非常に広がると思う。ランニングをしようと思ったら、箱根駅伝や日本のマラソンで記録持っているような人が近くでコーチをやっている、シーズン前の読売巨人軍の、今は1軍に上がっているが、当時2軍の選手が狛江の小学校を訪問してくれる等、狛江という中で完結している話ではなく、近くに何かがあり、それを上手に活用すると、スポーツを身近に感じることができるのではないかと。また、トップクラスのものに触れることができるというのは、地域の特徴ではないかと思う。以前住んでいた地域では、近くでスポーツに携わっている人と遭遇するようなことはあまりなかった。そういった意味で、スポーツ競技をしている団体は視野を広げると多いと思うため、狛江の地域性を活用して、近隣も含めて連携できると良いのではないかと。

歴史については、先程の話を伺って、魅力的なものがある一方で、その活用がされていないのだと感じた。

梶川委員 図書館についてだが、市民へのアンケート調査において、図書館をもっと充実させて欲しいという意見が出続けていること、図書館の利用率が下がっていること、というのは残念である。図書館を利用してもらえるためにどのようにしていくのか考えていく必要がある。

市民文化についてだが、市による音楽や絵手紙の発信、イベントの開催等

が資料に記載されているが、そもそも市民文化というものは、市が発信して創り出すものではなく、市民が自分たちの手で創っていくものである。数年前に市民活動支援センターが開設されたが、その後、どの程度市民発信による地域でのイベント等が行われ、市がそれに対してどのようなサポートをしてきたかというところも大事な視点の一つであると思う。市民活動がどのように活性化してきたのかということが大事である。

歴史についてだが、個人的に狛江の歴史については非常に興味がある。以前住んでいた地域では郷土資料室のようなものがあり、出土品や昔の人の暮らしを知ることができた。そういう施設が狛江にはないということだが、新しく箱物をつくるのは困難だと思うため、例えば、各学校の空き教室を使って順番に回っていくことや、市民センターの改修の際にそのようなスペースを設けるという形で、常設や移動式、バーチャル等でも良いと思うが、市民の目に触れるように文化財を発信していく必要があるのではないかと。

周東委員 歴史資料もあり、古墳もまだ残っていることは狛江の魅力の一つだと思う。市民も関心が深く、公民館活動の中でも取り上げている。生涯学習の観点からも、市民が自主的に歴史に興味を持ち、学習できる系統が積み上げられると良いと思う。

公民館についてだが、高齢者が多いため、受講する市民が固定化されていると記載があるが、確かに高齢者は多いと思う。一方で、高齢者が多いから問題というのではなく、その人たちがもっと学び、それを活かすための支援を公民館が行っていくことが必要だと思う。また、若い世代が公民館に来て、学んだり人と交わったりする機会というのは、今の開館時間だと難しいと思う。例えば、公民館の開館時間をもっと長くすることや、夜でも勉強することができるようフリースペースを公民館の開館時間以外でも使えるようにする等、人のつながりができるような場が必要だと思う。また、公民館の職員についてだが、人とのつながりの促進や生涯学習活動の相談に乗り、新しい事業をつくり上げていくという専門的な知識を持った職員の確保が必要だと思う。

委員 長 社会教育主事は、公民館に配置された職員が講習を受ければ、資格が認定されるため、公民館の機能を高めるためには、社会教育主事の研修をきちんと受けた人の配置が必要だと思う。

林 委員 図書館についてだが、現状と課題の記載が少ないと感じる。例えば、文部科学省において図書館は地域の課題を解決する拠点であるということをおっしゃっており、狛江の図書館においても市民の相談に乗るということをもっと打ち出しても良いと思う。調布ではビジネス支援も打ち出して、資料コーナーの設置や商工会と連携した講座を開催している。また、健康情報コーナー等も

設置している。現在の狛江の図書館ではスペースが不足しているのは分かるが、利用率が下がっていることにも目を向けないといけない。人口比に対する子どもの利用率は高いため、子どもの居場所としての役割や、絵本の読み聞かせ等の子ども向け事業も重要である。地域の図書館によって事業内容にバラツキがあるが、子どもの場合は、直接の支援を行わないと利用につながりにくいいため、バラツキがあるのは非常に残念である。また、学校図書館との関係も大事である。

公民館については、もっと横断的に連携したら良いのではないか。例えば、市民活動支援センターや健康講座等での健康推進課との連携等、関係部署との連携をとることも必要ではないか。

歴史については、狛江には古民家園があり、以前はそこで、古老に話を聞く等、歴史に触れることができるイベントを行っていたが、現在、市の直営に戻ったため市民が深く関わられるようなことが減ってしまったので残念だ。

太田委員 スポーツについてだが、高齢者になると、仕事をやめた時に初めて、健康に関心が向き、運動するようになるが、若い世代に向けて運動をどのように促進していくかというのは難しいところがある。また、運動をいかに始めさせるか、継続してもらうかということも考えていく必要がある。そのためには、近くに運動する場所があるかどうか重要である。これは場所のみではなく、仲間がいるということである。それに加えて魅力的な指導者がいることも大切である。仲間づくりを意識した運動のやり方を考えていく必要がある。

また、フレイル予防というものに昨今焦点が当てられている。他自治体ではフレイルを予防するために、住民同士が評価するような仕組が構築されているところもある。チェックする立場になること自体が、健康づくりにつながることになり、フレイルだと診断された人は、自分が何をすべきか学ぼうとするため、運動のきっかけづくりになる。運動も大切だが仲間がいることも健康という視点で考えた場合は大事だと思う。

委員長 公民館とか図書館を、市民の居場所としてつくっていき、個別に独立した形ではなく、それらがネットワークを張って連携し、子どもから高齢者まで様々な人を支えるものになる。図書館や公民館、福祉施設等が、縦割りになるのではなく相互に連携する必要がある。そのためには、図書館には司書、公民館には社会教育主事、福祉施設にはソーシャルワーカーがいる等、専門職がいないと難しいと思う。先程梶川委員が言っていたが、市民の文化活動やスポーツ活動は、市民が自ら創っていくものであって、市役所がつくるわけではないというのは、同感である。市は場づくりを支援していくものである。新しい施設を作るのは難しいため、既存の公民館や図書館、福祉施設等を活

用しながら、それをつなげていくと、狛江市全体に多様な場ができ、その中で、スポーツや文化活動、生涯学習の場を用意していくことができるのではないかと。1・2年でできることではないが、5年間で段階的にできれば良いと思う。

周東委員 狛江でも近年様々なイベントを行っているが、本当に皆が楽しみながら、かつ、仲間づくりにもつながるようなイベントが市民の中の発想で出てきて、それを市が援助するという形が出てくると良いと思う。

林委員 資料の施策の現状と施策の課題というのは、担当課が記載したものであるのか、それとも事務局でたたき台をつくったものか。

事務局 担当課が記載したものを今回提示させていただいた。

林委員 図書館については、市民センターの増改築については協議中なのは分かるが、それはそれとして、図書館サービスは現在も実施されているため、その現状と課題についてもう少し洗い出すよう、担当課に掛け合っていたきたい。

事務局 次回の議論までに対応させていただく。

周東委員 指標についてだが、前回の総合基本計画の策定の際にも、本当にこの課題に対してこの指標が適当なのかどうかというのは疑問であった。今回も指標を用いると思うが、どのような指標がふさわしいかという点については議論していく必要がある。

委員長 私も様々な計画づくりに携わってきたが、指標の設定は確かに難しいと思っている。量的な指標だけではなく質的にどう評価するのか、両方がないとだめだと思う。量の評価も大事であるが、量で測れる問題と質で図らないといけない問題があると思う。

事務局 今後、各分科会で施策の方向性等を議論していく中で、庁内のプロジェクトチームにおいて指標は議論させていただきたいと思っている。指標については、量的な観点と質的な観点の2つの観点から選定していきたいと思っている。

議題3 その他

委員長 その他特に意見等なければ、第2回狛江市基本計画策定第三分科会を終了とする。